

■活動レポート

■学芸員室より

ニホンオオカミの謎にふれる

企画展「消えゆく岩手の自然—生き物たちのメッセージ—」によせて

大石雅之（学芸第一課長）

鯨類化石研究の一環としてカメイ社会教育振興財団の助成を受け、9月上旬にベルギーの王立自然科学博物館とドイツのフンボルト大学自然史博物館へ行ってきました。どちらの博物館も県内産鯨類化石を含むグループの中での重要な標本が所蔵されています。両博物館を訪ねる旅の途上、乗り継ぎ空港の関係からオランダのライデンにあるナチュラーリス国立自然史博物館にも立ち寄ることができ、鯨類化石の研究に必須な現生鯨類の重要標本の調査（「だより100号」参照）も行うことができました。

ところで、当館では10月23日から企画展「消えゆく岩手の自然」が開催されます。この中で、絶滅したニホンオオカミについても紹介することになっていますが、ナチュラーリス国立自然史博物館には、江戸時代にシーボルトがオランダに持ち帰って1839年にテミンクが新種記載したニホンオ

オカミのタイプ標本（模式標本）が所蔵されています。今回鯨類骨格標本の調査でお世話になった哺乳類部門の責任者クリス・スミーンク先生にお願いし、ニホンオオカミのタイプ標本の写真も撮らせていただくことができました。

新種記載の元となるタイプ標本は、通常その論文の著者が唯一の標本を選んでホロタイプ（完模式）に指定する必要があります。しかし、テミンクは三つの標本、つまり1)やや小さい個体の剥製（写真上）とその頭骨と推定される標本（写真右下）、2)それより大きい頭骨だけの標本（写真左下）、そして3)やはり小さめの頭骨と骨格からなる標本をタイプ標本としました。

ところが、スミーンク先生によると1)は野犬ないしはイヌとの雑種、3)はイヌの可能性があり、そういった問題は、シーボルトの時代からも認識されていたのだそうです。本当にニホンオオカミといえる標本は2)の頭骨だけということになりますが、従来は1)の剥製が重要視されがちで、このことから動物命名規約上の複雑な問題に発展する可能性も出てきています。ニホ

ンオオカミの問題を解決するためには、新種記載当時の混乱の整理を含めた徹底した研究がいまなお必要な状況にあるといえるわけです。

ナチュラーリス国立自然史博物館には、日本からもたらされたたくさんの標本をはじめ、自然史科学の発展に寄与してきた膨大な数の標本が保管されています。この博物館が研究型博物館で、つい最近まで一般向けの展示室がなかったと聞くと、驚く人も多いかと思います。収集資料が博物館の根幹をなすものだ、ということをおぼろげに認識させてくれるのが、ナチュラーリス国立自然史博物館なのです。



■解説員室より

ご存じですか？『ビデオコーナー』

福田詠子（解説員）

2階・サービスコーナーには、ミュージアムショップ、ハイビジョン室、閲覧コーナーなどがあり、皆様から大いにご利用頂いております。ところでここにはもう一つ、もっとたくさんの方にご利用頂きたいコーナーがあります。それが「ビデオコーナー」です。

ビデオコーナーは、県内に古くから伝わる郷土芸能・祭・風習などを記録した貴重なビデオを自由にご覧いただけるコーナーです。ビデオ本数は約150本。他ではなかなかみられない見応えのある映像資料がこ

こにズラリとそろっています。

その多くは県内各地に伝わる郷土芸能の記録映像です。神楽、鹿踊り、剣舞や田植え踊りなどの演舞はもちろん、稽古風景や道具の紹介など舞台裏まで迫った興味深い内容のものが目白押しです。中でも「中野七頭舞」（岩泉）や「鶴羽衣鹿踊」（江刺）はファンが多いようで人気プログラムになっています。岩手県では大変多くの郷土芸能が各市町村で演じられていますが、お気に入りのものを一度にいくつも、しかもじっくり観る事ができるのはこのビデオコーナーならではです。

また、民俗資料の記録では雫石の「曲り家」についてや、現在行われなくなった婚礼儀式的再現「御祝儀—雫石・昔の婚礼

—」、田炉裏端で鈴木サツさんが語る「遠野むかしばなし」、「チャグチャグ馬コ」など、親しみ深い内容のものも数々あります。

ゆっくりごらんになりたい方、ちょっとだけという方、どうぞお気軽にサービスコーナーの解説員にお声をおかけ下さい。そしてお気に入りのビデオを心ゆくまでご堪能ください！

